

①大学（薬・香薬以外）

② 入試区分

I 期B日程

③ 出題科目

現代の国語・言語文化（古文・漢文を除く）

④ 出題の意図

問題の一は、北山修『意味としての心「私」の精神分析用語辞典』から出題。話すことの意義と効用について論じた論説文。設問では、漢字の書き取り・読み、慣用句の空欄補充、キーフレーズの具体的内容(記述)、同具体的内容(選択肢)、キーセンテンスの言い換え箇所、本文の趣旨の把握などを問うている。問題の二は、藤沢令夫『プラトンの哲学』から出題。『ソクラテスの弁明』の内容を基にプラトンの哲学について解説した論説文。設問では、基本語の言い換え、キーフレーズの具体的内容、副詞の意味、空欄補充、本文の趣旨をふまえた理由説明、四字熟語による言い換えなどを問うている。問題の一・二とも、論説的文章の標準的な読解力をはかる問題となっている。

現代の国語・言語文化「古文・漢文を除く」

— 次の文章を読んで、あとの設問（１～６）に答えよ。

「はなし」を「話」と一般的に表記するようになったのは、明治になってからだと言われます。かつては「話」は「かたる」と読まれることがあつて、「はなす」には「噺」「咄」という字が当てられていましたが、「噺」は今でも落語家などを指すときに使われています。古い「はなす」は、肩のこらない雑談、くつろいだおしゃべりを意味していましたが、今日の「話す」にもこの意味が確実にあります。この気楽に言い放つから、「はなす」の語源が「放す」からきたものではないかという説が民間に生まれ、実際に「はなし（咄）」に「放」の字をあてている例もあるようです。『大言海』には「心事を話すの意か」とあり、口から離すの意という説もあるのですが、これらは語源的に「話し」が「放し」「離し」と分化する現場が押さえられないため、支持されないようです。山内洋一郎は、強い意志のある「放つ」から束縛を緩めるといふ弱い意味の「放す」が派生して、心の束縛を解き放つ、とりとめのない話をする、というように転義していくしていますが、話すことが心身の緩みと連動しているところを捉えた見事な解析ではないでしょうか。

ところが日常ではその解放感にもかかわらず、むしろ話さないこと、語らないこと、言わないことが美徳視され、^①「沈黙は金」「言わぬが□」「以心伝心」「腹芸」「言外の意図」と言われます。語ること、話すこと、言うことはシヨウレイ^②されていないのです。これと同時に、べらべら、ぺらぺら、ぺちゃくちゃ、つべこべ、くどくど、くだくだ、うだうだ……と、話すことしゃべることに伴う形容ではマイナスの評価が数多く言われて、言語の具体的運用である話すことには不信任がつきまといまいます。コトが事と言とに分化するという過程を考えるなら、事実（マコト）は言（コト）のほうではなく事（コト）のほうにあると言われるくらいであり、逆に話とは不誠実で真実性を問われないからこそべ

らべら雑談できるのかもしれませんが。そこで日本語学者の芳賀綏^{はがすし}の言い方を借りるなら、これは「語らぬ」文化、「分
からせぬ」文化なのであり、言葉によって相手に働きかけ、相手を動かし、相手を変えろという実用的な見方が日本人
には、「ピンとこない」のです。ところが、言葉の実用面ではなく、儀礼的表現や芸術的表現には特別な価値がおかれ、
美意識や技芸の面から表現に磨きをかけようとしています。しかしそこから派生するセイヤクや不自由さは言葉の実用性を
ますます低下させることになってはいないでしょうか。

我が国では、精神療法においても非言語的交流が重視され、非言語的な媒体による治療が注目されてきました。同
時に、日本人の治療では言語の機能と効用を最大限に生かそうとする精神分析的方法は向かないとも言われてしまし
た。ところが、患者たちと話すための時間と空間を治療者が確実に用意して聞くことに徹するなら、患者は皆よく話し、
よく喋る^{しやべ}し、ぺちゃぺちゃ喋りながら、同時にその喜びを語ります。常識に反して、言葉は相互理解や気持ちを伝える
ことにも役立って、人を変えることもあります。

確かに「おしゃべり」は尊敬されないことがあり、「おはなし」には「口先だけ」という意味合いがあるのですが、
私たちの言語不信は公的な場、つまり人前のことであり、「日本人は臨床的にも無口である」などという発言は、話に
花が咲く臨床体験からは「戯言」と言わざるをえないのです。緩んだ放言は本来的に楽しいし、少なくとも患者が治療
者とゆつくり話すための時間と空間とを求めています。センレン^⑥されない話でも醜聞^⑦でも、話になる場さえ与えられる
ならば、ただ無意味に無責任に話すということの喜びと価値は話し手により証言されているのです。ゆえに会話や発言
に伴う不信感^⑧は本来的なものではなく、むしろ聞き手や受け手との間で意味レベルで生じる裏切り、誤解、傷つき、幻
滅、空しさなどと共に学習されるもので、「話したところで何も伝わらない」しむしろ「滅多なことは言わない方がいい
い」という感覚は成長と共に増していくのではないのでしょうか。

多くの子どもたちがうるさくて騒々しく、お話し好きでよくしゃべります。「語らぬ」文化ではこの喜びが、最初の
聞き手であり受け手である人々、つまり親たちや親たちとの関係によって否定されやすいのでしょうか。話すことの喜び

は、話しつ放しにするのが許されるところにあり、雑談や放談にこそ原初的な喜びや価値が見出されるのではないでしょう。その意味では、聞き手の気楽に話さない態度も、儀礼的表現に神経を使う態度も、話されたことの意味を執拗しつように問う態度も、話し手の無神経に話すことの喜びを奪い取ることになるでしょう。つまり、聞き手がいくら時間と空間を用意したとしても、解釈的な態度では皆が話し手にとって「話せる人」で「物分かりのいい人」になるとは限らないのです。

「話し」が「放し」であり、本来気楽な雑談であったとしても、同時に「手柄ばなし」「みやげばなし」「昔ばなし」と言われ、人々の関心を引くために面白いものでなければならぬという要請が生じやすいのでしょう。ゆえに、話の値踏みをして「お話にならない」（価値がない）「面白くない」と判断する態度を持ち込むことも、話の気楽さや緩さを壊す可能性があります。日本人の言葉不信は、むしろ言葉を大切にしたいからだと言われ、言葉の意味に対する不信感も、意味を信用したくともそうはいかず言葉に裏切られ絶望しているからかもしれないのです。だから言語的な臨床では、むしろ言語不信の問題から始める必要があるでしょう。ゆえに大人は、話の腰を折らぬために、そして話を進めるためには、話を頭から信用して真に受けるのではなく、また面白さを期待するのでもなく、言葉については「話半分」くらいの態度で臨む必要^⑩があります。そうして聞いていたら、本当に言いたいこととは、話された言葉の上にあるのではなく、その背景や深層の「意図」や「心」にあるということがわかってくるのです。

（北山修『意味としての心「私」の精神分析用語辞典』による）

設問

1 傍線部②③④⑥⑦⑩について、カタカナは漢字になおし、漢字はその読みをひらがなで記せ。

2 傍線部①の空欄に入る語と同じ語が空欄に入るものを次のうちから一つ選んで記号で答えよ。

ア 知らぬが ☐

イ ☐ より団子

ウ 時は ☐ なり

エ 立て板に ☐

3 傍線部⑤「言葉の実用性」とはどのようなことか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えよ。

4 傍線部⑧「話になる場さえ与えられるならば、ただ無意味に無責任に話すということの喜びと価値は話し手により証言されている」に相当する内容を述べている部分を本文中から八十字以内で抜き出し、その初めの五字および終わりの五字（句読点を含む）をそれぞれ記せ。

5 傍線部⑨「言語不信の問題から始める」とはどのようなこととして示されているか、最も適切なものを次のうちから一つ選んで記号で答えよ。

ア 相手の話をすべて信じるのではなく、疑いを持ちながら聞くこと。

イ 嘘をついたり相手を裏切るようなことはしないと約束をすること。

ウ 言葉の意味を明確にして誤解や勘違いが生じないようにすること。

エ どのような話をしてもらえという信頼関係を築くこと。

6 次のうち、本文に述べられた主張に合致しないものを一つ選んで記号で答えよ。

ア 話すことの喜びや価値は気楽な雑談にある。

イ 日本人は本来的に話すことを好んでいない。

ウ 言葉は実用的な方面で役に立つこともある。

エ 言葉自体にとらわれず話を聞く必要がある。

二 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

① 哲学についてソクラテスが自分の考えを語った言葉（言説）は、彼が法廷で行なった弁明演説のプラトンによる再現、『ソクラテスの弁明』（以後は『弁明』と略記する）の中になんり集中して表明されている。以下においてこの『弁明』を中心に、哲学にかかわるソクラテスの考えを見ることにするが、われわれの関心はもっぱら「プラトンの哲学」にあり、歴史上に存在したソクラテス自身の思想がどのようなものであったとしても、われわれとしてはプラトンがそれをどう受けとめたかを知ればよい。

『弁明』においてソクラテスは、自分に向けられた古くからの、ふつうソフィストたちについて言われるような中傷に対する本格的な反論と弁明を、彼がもっている自分と自分で認める「知」の性格を説明することから始める。ここで語られる「知」のあり方こそ、ソクラテスの——そしてまたプラトンの——「哲学すること」における肝心な点なのである。

ソクラテスは、人間を教育すると豪語して金を払わせるソフィストたちの「知」を、皮^{エイローネイア}肉をこめて「人間なみ以上の知」と呼び、それに対して自分ももっている「知」を「人間なみの知」と呼んで区別し、その意味を、デルポイの⁽¹⁾神託をめぐる自分の体験によって説明する。⁽²⁾

よく知られている話と思うので、要点のみにとどめるが、ソクラテスは古い友カイレポンから「ソクラテス以上の知者はいない」というデルポイの神託を告げられる。自分が知者などではないことを自覚し、しかしまた神が嘘をつくはずはないと固く信じていた彼は、驚いて、いったい神は何を言おうとしているのかと、真剣に思い迷う（われわれ凡人ならちようどソクラテスと逆に、神託など本気で信ぜず、そのくせそう告げられればまんざら悪い気はしない、といったところだろう）。

そこでソクラテスは——これもまたユニークな行動だが——世間で知者とみなされている各界の人物、今ならさしずめ「賢人会議」とか「有識者委員会」などのメンバーに選ばれそうな政治家、作家、技術の専門家などに当たってみて、

現にここに私以上の知者がいるではありませんかと、神託を「反駁」⁽³⁾しようとしたのである。

「反駁」は成功したか？ 否。それらの人物たちは、自分が知者だと思いこんでいるけれども、ソクラテスが吟味してみると、実はそうでないことが判明する。ソクラテスはこう思った。

——善美にかかわる重要事についての無知はこの人も自分も同じだが、しかしこの人は「知らないのに、知っている」と思っている」のに対して、自分は、「知らないから、そのとおりになた、知らないと思っている」。このちょっとした違いで、自分のほうが知者だということになるらしい。

そしてあの神託の意味も、これだろうか？ 知ることができるのではないか。すなわち、

——「ほんとうの知者は神だけ」であり、それと比べて、「人間たちのうちで一番の知者とは、ソクラテスのように、自分が知に関しては何の値打ちもないと知った者なのだ」ということを、教えようとしたのにちがいない。

これが、「無知の知」という言い方でよく知られている、「④」の知」とソクラテスが呼んだ知のあり方である。^⑤ プラトンは、ソクラテスによるこの知のとらえ方こそ、「哲学」(philosophia=知の愛求)の確かな出発点であり、立脚点であるとしてとったにちがいない。なぜなら「無知の知」とは、換言すれば、

——自分が何事かを知っているとつい以前の状態に、つねに自分を置くことへのたえざる習熟

ということである。自分がすでに知っていると思いきんでいる状態からは、知への欲求は発動しようがなく、知らないことを痛感してこそ、知りたいと希求することになるという平明な意味において、これは哲学つまり求知の不可欠の出発点にはかならない。あるいはまた、

^⑥——ほんとうに知っていることと、たんに知っていると思いきんでいることを、あくまで厳格に区別しようとする構え

と言い換えることもできるだろう。つまりこの無知の知の構えとは、裏がえせば、「ほんとうに知っている」と言い切れるための条件、つまり「知る」ということの内実をほとんど限りなくびしくとらえること——特に「善美にかかわ

る重要事」については——を意味しているのである。

どのようにきびしくとらえるかというと、それはただ論理的整合性とか、認識論的に厳密な理論への要請といったことではない。そういうことも含むけれども、プラトンが理解したソクラテスの「知」のとらえ方のきびしさとは何よりも、「知」（知る）とはその人の行為の隅々まで支配する力をもつはずだ、そうでなければほんとうの「知」とはいえない、という「知」への要求のきびしさである。

例えば、あることがよいことだと「知って」いながら行なわない、というようなことは、ソクラテスにとってはそもそもありえないことであつた。それは要するに、ほんとうに「知って」いないのである。同様に、悪いことと「知って」（わかって）はいるがやめられない、という言い方には、「知る」（わかる）ということのルールなとらえ方に寄りかかった甘えがある。やめられないのは、ほんとうに「知って」（わかって）いないからだ。ソクラテスは指摘して、その甘えを禁止する。

（藤沢令夫『プラトンの哲学』による）

注（1） デルポイ……パルナッソス山麓に位置する古代ギリシアの聖地。アポロンの神殿があつた。

（2） 神託……神のお告げ。

（3） 反駁^{はんぱく}……反論。

設問

1 傍線部①「哲学」について、ソクラテスの考える「哲学」を別の漢字二字の熟語で表した語を本文中から抜き出せ。

2 傍線部②について、ここで筆者が述べるソクラテスの「ユニークな行動」とはどのようなことを指すか。二点指摘せよ。

3 傍線部③「さしずめ」とはここではどういう意味か。次のうちから最も適当なものを選んで記号で答えよ。

ア ともかく イ かりそめに ウ つまるところ エ 直接的に

4 空欄④に入れるべき本文中の五字前後の語句を記せ。

5 傍線部⑤について、プラトンがそのように見てとったと筆者が考える理由を、文章全体の趣旨を踏まえて、六十字以内で述べよ。

6 傍線部⑥「ほんとうに知っている」とはどういうことか。ここでその意味することを表すのに最も適当な語を次のうちから選んで記号で答えよ。

ア 全知全能 イ 温故知新 ウ 一知半解 エ 知行合一 オ 知者楽水

